（『国語学』177集　1994・6・30）

音韻（史的研究）

釘貫亨

一、口頭発表

九三年の国語学会秋期大会（北海道大学）において、テーマ別研究発表会「音韻史の展開――音節構造の変遷――」（『国語学会平成五年度秋期大会要旨』'93）が開かれた。窪園晴夫（「音節量の観点からみた音節構造の変遷」）は、日本語の記述にはモーラ（＝拍）に加えてシラブルの単位が不可欠であるとしてシラブルの内部構造による「音節量」の観点の導入を提起する。音節量はたとえば二モーラからなる長母音が一モーラの短母音の倍の「重さ」を持つとして、日本語は通時的に軽音節（CV）の構造から重音節（CVV、CVC）の構造へ無標の位置を移行させたととらえる。このような歴史的移行過程は日本語だけの現象ではなく、ヨーロッパ諸言語においても共通してみられる傾向であり、重音節が普遍的に無標の音節構造であり、かかる変化はこの無標構造へ向かう普遍的な音節現象であることを示唆するものであるという。しかし、さほどに普遍的な音節構造が、何故最初から準備されていないのであろうか。無標構造たる重音節が軽音節に比べて、情報処理の面においてどれほどの合理的変化をとげたのかをも併せて説明してはじめて歴史記述が完成するであろう。早田輝洋（「音韻史の展開――音節構造の変遷――」）は、上代語には音節とモーラの区別がなかったという通説を確認しつつ、音節構造が(C)Vの短母音開音節のみという、日本語に似て稀有な構造を持つロロ語の現実を参照すべきことを説く。上代語の音節構造の具体相がいかなるものであったのかは「全く解明されていない」と断った上で「時代を遡れば遡るほど、モーラよりも音節がアクセントの担い手になるかも知れない」という状況を提案する。木田章義は等時性に基づくリズムを単位とするモーラ構造が歴史を通じての日本語の特徴であると主張した。木田のモーラの論は、現代語の経験則から割り出されたものとしては通常の理解を示していると思われるが、歴史的概念としてのモーラは、等時性という音声学的事実に直接基づいているのではなく、仮名表記の存在を状況証拠として直観的に抽出された擬制的単位であり、したがって「音声学的」には定義できないものであるとの印象を受けた。窪園が、等時性を根拠とするならばストレス間の等時性が観察される英語を始め、世界中の言語がモーラ言語であると主張し得るとして木田の論を批判するのはこの点を衝いたものである。柳田征司（「母音優位・子音優位」）は、ハ行動詞や形容詞連用形の音便、断定の助動詞、アクセントなど東西両方言

は大きく様相を異にするが、これらはオ段長音の開合の混乱やヂャの破擦音化などの特定の原因によって分化したにすぎず、基層語の違いや母音優位・子音優位というようなある本質的な相違によって分化したものではないと説く。

二、著　書

阪倉篤義『日本語表現の流れ』（岩波書店、'93）では、上代特殊仮名遣の崩壊を古代語の多音節化の趨勢との関連から論じている。従来、諸家によって直観的に指摘されてきたものを、整理・調査された具体的資料によって論証している点が新しい。ただ、rendement fonctionnel を「機能効率」と訳するのはどうか。この語を用いている翻訳書も有るようだがこれは一義的には数量の問題であって、これが直ちに「効率」を表示しているのではないからである。柳田征司『室町時代語を通してみた日本語音韻史』（武蔵野書院、'93）は、大著である。今後斯界の標準書として君臨するであろうが、小稿では到底扱いきれず、評価はしかるべき人物と場所に委ねたい。

三、論　文

1　音節構造の変遷

札幌の学会のテーマであった音節構造の変遷については理論的関心が高い。高山知明「日本語における長音節の形成とその歴史的意味――とくに和語の促音・撥音について――」（『日本語と日本文学（筑波大学）』16、'92）は、九世紀以後「日本語の語彙のうちの、核をなす部分（一般の和語）」の中に促音・撥音（長音節）が用いられ始めるが、これを、言われるような漢語の影響ではなく「日本語内部の問題」であると する。長音節が和語の内部に発達することによって、その部分に形態素の境界が来ないことが積極的に示されるようになったという。これはとくに三モーラ以上の語において境界の有無を明示する必要に迫られたためでその背景には当時における多音節語の比率の増大化傾向があったという。語の多音節化傾向を境界確定機能と関連させて論じるところが理論上の眼目であろうが促音・撥音を無前提に一拍扱いにして「長音節」を論じ始めるのは最近の議論に照らしていかがなものか。高山「日本語における連接母音の長母音化――その歴史的意味と発生の音声的条件――」（『言語研究』101、'92）は、一一世紀以降生じた単一形態素内部の連接母音の長音化が形態素初頭のuに境界確定機能を付与し、これが語句のまとまりを容易に把握し得る方向への推移であったとする。この趨勢は、音便の発生やハ行子音の変遷と同一のものであるとするのは前稿から引き続く高山の主張である。屋名池誠「母音脱落――日本語上代中央方言資料による形態音韻論的分析――」（『女子大文学（大阪女子大学）国文篇』43、'92）は、文法的要素の結合上のヒエラルヒーを基準にして環境分類し、母音脱落の出現のありようを規定する形態音韻論的語彙論的諸条件を括り出している。要素結合の後項先頭の母音脱落（V〔V〕型）も前項末の母音脱落（〔V〕V型）も複合名詞の場合に最も典型的な規則的制限が現れるようだが（従ってこれが最も音韻論的である）これらの制限は、多量の情報を処理していく上ではむしろ邪魔物のはずで評者などから見ると、かかる規則的制限は伝統的なCV構造を維持しようとする力と要素を連結させて情報に対処しようとする新しい力の衝突の結果生じたもののように思われる。これらの諸条件はどのみち解体したものだろうが、その過程をどう記述するか。屋名池には、このほか「ある連

音忌避」（『松村明先生喜寿記念会編国語研究』明治書院、'93）があった。沼本克明「字音直読資料の長音表記の変遷――音節構造との関連――」（『訓点語と訓点資料』88、'92）は、鎌倉時代以前に伝来した日本漢字音（呉音・漢音・新漢音・宋音など）の直読資料では原則として長音表記が出現せず、江戸時代に中国語音が転写された唐音資料では現代中国語の仮名転写法と同様に長音表記が普通に出現するようになる、という。これは、江戸時代以前の日本語におけるシラビーム言語からモーラ言語への転換を反映するものとする。その転換期に当たる宋音と唐音資料群に声点がまったく加えられていないのは、この音節構造の転換によって中国語音の声調の認識が困難化した結果、その習得を放棄したことの反映と見る。遠藤邦基「近世初期のオ段合長音と非長音――語彙による「ゆれ」の要因――」（『叙説（奈良女子大）』'92）一六、七世紀キリシタンローマ字文献には、現在では長音に帰する歴史的仮名遣の「オ列音＋（ヲ）」形が非長音（ｕｏ）と長音（ｏ）の二種の表記で現れるが、同源の「大きに」（口語形・長音）と「大いに」（文語形・非長音）とが位相差に応じて併存することを手がかりに、オ段長音化の進行の遅速を口語と文語の位相による語彙の違い（仮名と漢字の表記性向も関連）によって論じる。「長音形をとる語彙群は非長音形を保存する語彙群に比較して仮名表記される比率が極めて高い」とされるように漢字による表記を常に念頭にいれて発音する場合には「漢字が音変化を抑制する作用を持ち、結果として音の変化に対して保守的となる」という。結論は穏当だが語彙や文字表記の振る舞いが音韻変化に介入するという視点は今後の研究動向を示唆する。

2　ハ行子音をめぐる問題

ハ行子音の変遷とハ行転呼音を理論的関連のもとにとらえる試みがいくつかでてきた。林史典「「ハ行転呼音」は何故「平安時代」に起こったか――日本語音韻史の視点と記述――」（『国語と国文学』（69-11、'92）は、在唐記の記述をめぐるハ行子音の音価について、ｐ音かΦ音かという択一的な議論を排除し、「日本語のハ行子音が、まさにｐからΦへ移り変らんとする状態を仮定」して母音間のｐ音については、ゆるんだ発音（つまりΦ音）が状態として進行したと推定する。そこで「母音間のΦをｗ化したところのもの（すなわちハ行転呼音）は、外ならぬｐからΦへの推移、すなわちｐの摩擦音化そのものだった」と結論する。林の論は従来、別個に記述されることの多かったハ行子音の変遷とハ行転呼音を、関連したものとしてとらえようとしたもので理論上意欲的なものであるが、一連の変化の出発点である「ｐの摩擦音化」が何故「平安時代」に起こったかの問題が残っている。林「古代語の音韻・音韻史」（『日本語要説』第六章、ひつじ書房、'93）は、初学者向けの概論書であるが内容は近年の機能論的音韻史の成果に立脚して先進的である。「ハ行子音の歴史」と「ハ行転呼音」については林前稿の説を生かす。ｅとｊｅの区別の失われた理由を「音韻体系の内部における対立のもろさ」に求め、「この場合、もろさとはすなわち二つの音の近接性と機能的負担量の低さである」とする。直接の契機はその通りであると思うが、このような「もろさ」は奈良時代以前にも存したはずである。奈良時代には対立が崩れず、一〇世紀中頃にこれが生じた理由を指摘してはじめて歴史の記述が完成する。伊坂淳一「ｐ音は復活したのか」（『言語』22-2、'93）は、中古以後、文献で確認される種々の俗語的口頭語的ｐ音が、実は日本語の歴史に一貫して存在するものであるとしてこのｐ音の口頭語的

「本領」がいわゆるハ行子音の摩擦音化による「弁別的機能からの解放」に伴ってかえって露わになったとする。このような「解放」が何故中古になってから生じたのであろうか。肥爪周二「悉曇学とワ行」（『国語と国文学』70-2、'93）は、現存最古の音図でありハ行転呼音の古徴とされてきた醍醐寺蔵『孔雀経音義』付載の音図について「比ヒ 火ホ 八ハ 不フ 干ヰ 乎ヲ 惠ヱ 宇ウ」というハ行とワ行の併記が日本悉曇学における梵字vaの転字の発音に際して、ワ行に読める音写漢字を梵文に従ってバ行に読んだという字音上の交渉に原因を求めようとする。肥爪はこれがひとつの解釈可能性の選択肢を提示するものにすぎないとしつつも『孔雀経音義』の音図が漢字音の反切に利用されたとすれば本経の音読には「ハ行転呼音の表示は不要であるという点は動かない」とする。そこで本経音義の音図の記述がハ行転呼音という日本語の現象を反映するものとして扱うことは望ましくないと結論づける。論理の展開に堅実さを認めた。

3　清濁をめぐる問題

高山倫明「連濁と連声濁」（『訓点語と訓点資料』88、'93）は、清濁の音声的対立を、声の有無によるものとする通説に疑問を呈する。連濁について形態音韻論的なものと音声的なものに分類し、後者では鼻音の後で促進されることに注目する。鼻音後の連濁が現代語では観察されないことから、清濁の対立の弁別的特徴が古代から現代に至るまでに転換を遂げたと推定し、古代語における清濁の対立を早田輝洋（'77）の説によって無声／有声ではなく、非鼻音／鼻音としてとらえる。高山「清濁小考」（田島毓堂・丹羽一彌編『日本語論究』2、和泉書院、'92）は、清濁を非鼻音／鼻音の対立とする考えに立って諸家の説を検討し今後の研究動向を展望する。注目されるのは、母音間の子音の弱化によりkやΦが有声性を帯びて実現されることもあり得るとする見解で、その場合、清濁を声の有無の対立でとらえると清音の枠内での有声化現象を説明できなくなる。清濁を鼻音性の有無でとらえる根拠がここにある。問題の子音間の摩擦の弱化が何故中古初頭に生じたのかという問題が残っているがハ行転呼音やイ・ウ音便の発生をこれによって統一的に説明できるとするなど論証力にすぐれ、音声記述にもリアリティがあって理論的に発展するかも知れない。鈴木豊「『日本書紀』声点本における濁音標示」（『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』明治書院、'92）は、日本書紀の差声開始時においてはアクセント標示が唯一の目的であり、濁音の情報は万葉仮名自体に含まれていたが、時代が下るにつれて情報量を減らし「清濁を区別しない平仮名・片仮名が成立するにいたったため、万葉仮名が内部に持っていた濁音標示機能を補うために濁声点が発達してきた」とする。同時期の古訓点資料や名義抄などの濁音標示も同様の説明が可能なのか。沼本克明「類聚名義抄における濁音字母の歴史的位置」（『国文学攷（広島大学）』132・133、'92）濁点の発想は、仮名通りの発音をしてはいけないという注意点（有標記号）であり、それを声点にかぶせた（すなわち濁点）のが天台宗であり、「、」「レ」などを仮名の右肩にかぶせて表示したのが南都古宗および真言宗系であった。名義抄では字音和訓を問わず「〃」複声点表示が広く行われているが名義抄のような法相系の教学の系統下のものであっても複声点方式に統合されつつあったことを示すものという。他の法相真言系訓点資料においても一一〇〇年頃を境に複声点を使用するものが現れるという。観智院本名義抄では字音表記に限って濁音字母

（我・義・具など）が用いられるが、これは平安時代初期の訓点資料において用いられた濁音字母を継承したのではなく、九〇〇年頃を境にした陀羅尼（及び字音）音読の際の清濁書き分けのために、天台真言僧によって導入された濁音字母を増補の過程で導入したものであると想定する。濁音字母が濁点使用へ統合されつつあった時期の文献として名義抄を歴史的に位置づけようとしたものである。沼本「濁音字母から濁声点へ――濁点の起源論続貂――」（『国語学』172、'93）は、万葉仮名による清濁表示の衰滅から濁声点の発生にいたる「空白期」を埋める試み。密教学の請来によって始まった梵語学習を反映して、平安時代の訓点資料では濁音字母は陀羅尼の梵音表記に限って使用され、一〇六〇年頃を境に消滅した。あたかもこれと交替するかのように種々の濁点類の使用例が増加するが、かかる交替は「略体仮名体系の中に混じる非略体仮名の排除という体系性を志向」して実現したものとし、試行錯誤の結果、社会的に統一された濁点の起源は、濁音字母の片仮名体系からの「消去」にあったと論ずる。「消去」の語にいささか抵抗がある。仮名使用主体の意志が語義の中に込められているものとおぼしいが、歴史記述の際の術語として熟しているかどうか。

4　字余り

毛利正守「上代日本語の母音変化――V2∧V3、V3＝V4の場合――」（『万葉』143、'92）は、副題に示されている条件下においてV3に前接する品詞を動詞、形容詞、助動詞、助詞のように下位区分して字余りの出現のありようと母音脱落の関わりの諸規則を割り出す。毛利「萬葉集の「（音韻的）音節」と唱詠のあり方をめぐって」（『国語学』174、'92）は、字余りを生じにくい（b）グループ（短歌偶数句、長歌七音句）と生じやすい（a）グループ（短歌奇数句と長歌五音句と結句）の相違が、唱詠の際の「音のとぎれ」の有無を反映したものであるとし、音のとぎれのない、一句全体を一文節のごとく唱詠する、その方法の中に字余り出現の原因を見いだそうとする。句を、単語を基本にした「音群」に分割し、これを唱詠の際の基本単位に据える。字余りの本質論に分け入った研究。毛利「萬葉集の句中に於ける母音の位置」（『人文研究（大阪市大）』44-13、'92）（b）グループは、比較的字余りが少ないといわれるが句中の「五音節目の第二母音」以後に母音音節が立つ場合は（a）グループと同様、殆ど字余りを生ずるとして、句中の位置が種々の語彙的文法的音韻的環境などとともに字余り現象の様相を規定する要素として注目する。（b）グループのなかのこのような環境は（a）グループと詠歌のリズムが同じであったことが想定されるとする。後半に資料篇を付す。

5　アクセント史に関する問題

松森晶子「日本語アクセントの祖体系再建の試み――いわゆる「下降式アクセント」の成立に関する考察をもとにして――」（『言語研究』103、'93）は、日本各地の方言で三モーラ語の第一、四、五類に見いだされる「下降式音調」（ダウンステップ）について、これを共時的に「二つのH（高い）音調の共起あるいは衝突によって生じた音調現象」とする。そこで、諸方言に現れる下降式は、このダウンステップが通時的に固定化したものという仮設に基づいて名義抄よりも一段階前の祖形アクセント体系を想定する。記述の前提である「仮設」の妥当性の判断についてはとりあえず措くとしても、考察の論理構成力が強く印象に残った。今後の展開を期待するが諸方言の三モーラ語第五類の「語頭隆起」のプロセスは、論者が提案した記述の原則に合致していな

いのが気がかりである。この現象を「讃岐全般の特徴」と述べる一方で白峰や金沢においても同様の変化を想定するのは不審である。

上野和昭「京都方言アクセントの遡行――近世後期以降の3拍動詞類推変化についての考察――」（『国語学』172、'93）は、『平家正節』（一八世紀後半）以後の京都アクセントの文献資料の欠落を補う形で京都周辺諸方言資料を使って三拍動詞アクセントの類推変化を理論的に考察したもの。●●○○∨●○○○、●●○○∨●○○○の変化の過程で、終止、否定、意志、禁止の各形において二類一段活と二類五段活のアクセント形が一致したことが逆に互いを「反発」させ、二類一段活が三類へ、続いて二類五段活が一類に吸収された。ここには三拍動詞を高起式、低起式の両極に再編しようとする力が働いていたとする。音韻変化の真の原因に迫ろうとする野心作だが、結果として両極に改編されたという事実から歴史を遡って、その時点では未知のはずのある端正な状態に向かって音韻変化が進むというとらえ方に問題はないか。「反発」の内容についての言語学的な説明もほしい。上野にはアクセント資料の評価を試みた「アクセント資料としての神原文庫本「名目抄」について」（『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』、'92）「名目鈔の声点標示について」（『早稲田日本語研究』創刊号、'93）があった。添田建治郎「図書寮本類聚名義抄に見られる「重複差声」の意義について」（『山口国文』15、'92）は、付訓仮名一字に対して二種類の声点を施した差声が「異例を承知の意図的なもの」であって、これらが、かつての京都語に存在した拍内下降や拍内上昇、二語連続や複合語における語形認識の差、同一の声調を異なる手法で写したもの、現実の声調の揺れを写すものなど種々の性格を反映するものであると論ずる。古代語の多音節化傾向の中でアクセントの再編が進みつつあった様相を活写している。添田「諸方言のアクセントの分派時期小考――三拍二（小豆）類名詞を手がかりとして――」（『山口国文』16、'93）は、古代末の京都語で●●○だった二（小豆）類の他の語類への分化傾向に関連して、方言アクセントとの対応関係の観察を通じて京阪式の体系からの分派時期を推定したもの。佐々木勇「長承本『蒙求』平安中期点の声調体系」（『国語学』168、'92）は、従来六声とされてきた本書の声調が実際は八声の体系であり、これらがすべて『広韻』の声調声母と独自の対応を示すことによって確認したとする。『悉曇蔵』などの記録では九声の体系が記載されているが、実際の読誦資料である『蒙求』によってこの系統の声調体系が確められた。奥村三雄「上代語アクセント小考」（『訓点語と訓点資料』90、'93）は、日本的呉音では韻書の平声＝高平調、上去声＝低平調に対応し、日本的漢音においてはその逆の対応になるとの仮説によって日本書紀歌謡の音仮名の分析から上代語アクセント体系再構の方向を模索する。沼本克明「鎌倉時代の二字漢語アクセントの構造――妙一記念館本仮名書き法華経による――」（『訓点語と訓点資料』90、'93）は、平安時代の九条本法華経音の去声字が本書では多く上声点で差されているがこれは古代末期に呉音の上に生じた去声一音字の上声化、上声または去声に下接する去声の上声化という二つの音韻変化の反映と見る。また本書のような和文系文献において知識音たる唇内喉内入声字の区別が弛緩しつつあった実態を述べる。梅崎光「入声とアクセント変化」（『語文研究（九州大学）』73、'92）は、『補忘記』「出合」譜記の一拍扱いの入声と二拍扱いの入声との混在を音節構造の変遷の観点にからめて論じたもの。「入声＋上声」の〈出合〉は「二拍平声＋上声」と同じ音調となるが入声韻尾が促音化した場合にのみ「一拍平

声＋上声」と同じ音調になるとし、当時の口頭言語の発音ではすでに舌内入声韻尾が開音節であり、伝統的で「典雅な」発音である舌内入声音として実現したとする。また「出合」成立期には促音や舌内入声韻尾は一拍の音として音数律の単位をなしていたとする。坂本清恵「契沖の声点注記について」（『早稲田日本語研究』創刊号、'93）は、語単位に声点を一つ差す第一種表記法による多拍語への差声についてアクセント史の観点から検討したもの。第一種表記法で用いられる声点のうち平声点については一字めに差す場合と最終字に差す場合とがあるが、前者は「一字めから二字めにかけての下降調を示し」、後者はそれ以外の下降調を示す可能性があるとする。坂本には初期義太夫節浄瑠璃本の資料評価を試みた「動詞未然形のアクセントと付属語の接続について――近松世話物浄瑠璃本を資料にして――」（『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』'92）があった。西崎亨「仁和寺本医心方・半井本医心方に於ける声点付和訓――特に去声点を中心として――」（『訓点語と訓点資料』90、'90）は、仁和寺半井両本の本草和名から掲出の声点付和訓を和名抄や名義抄と比較の上、医心方の声点は和名抄と「等差声点」を想定できるとする。また第一音節と最終音節に差される去声点の相違が、歴史的層の違いに対応するとした。森山由紀子「中院通茂『古今聞書』のゴマ点注記――再構される音調とアクセント資料としての性格――」（『国語国文』62-8、'93）は、本書のゴマ点注記が後水尾院の音声を書き留めたものと推定されるがこの再構音調は近世初期京都語に「期待される音調」と一致しないのは古今集音読の際の音調の変形を受ける傾向があるからだという。秋永一枝「『顕昭拾遺抄注』声点考」（『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』'92）は、成簣堂文庫所蔵本の書誌と声点注記による和歌の訓詁を試みる。資料評価に関するものとして石川幸子「『平家正節』の墨譜について」（『武蔵野女子大学紀要』27、'92）、阿部アキ子「大島本『源氏物語』における入声韻尾の無表記について――その現れる条件――」（『むらさき』29、'92）があった。

6　漢字音

佐々木勇「「方」の日本漢字音ハウ・ホウ続貂」（『国語国文』62-6、'93）は、「方」の日本字音には「ハウ」「ホウ」二形が存し、意味の違いによって使い分けがあるとされることについて古訓点資料の音注調査によってこれが呉音資料だけに観察されること、声調においても呉音（去声または上声）漢音（平声軽または平声）と区別されていたことを明らかにする。従来「ホウ」は日本で生まれた音形とされてきたが、調査によってこれが呉音の祖形音に淵源する可能性が浮上したとする。この「祖形音」自体に意味の相違による音形の使い分けの可能性を認め得るのかどうか、まだ議論の余地がある。高松政雄「合口呼字音の国語化――唇的拗音の消長――」（『日本文芸研究（関西学院大学）』44-3、'92）、日本漢字音におけるクァ・クィ・クェの唇的拗音の退化・消滅はハ行子音の変遷と一連のものとして考えるよりも、一義的には字音の領域を決して出ることのなかった唇的拗音がその「付け焼き刃的特性」によって国語音化する「自然の推移」としてとらえられるとする。キーワードの「自然」が直観的である。漢字音の国語音化については高松には「連母音とその融合――字音の国語音化――」（『国語国文』61-6、'92）があった。

奥村三雄「近世唐音の性格」（『訓点語と訓点資料』88、'92）は、黄檗系文献を中心に唐和纂要を加えた主要文献の字音表を提出したもの。岡島昭浩「近世唐音の清濁」（『訓点語と訓点資料』88、'92）は、清濁の

区別のない南京官話と区別のある俗語、浙江音との対立の文献への影響関係を考察したもの。

崎村弘文「岡嶋冠山著『唐音三體詩』の字音」（『訓点語と訓点資料』88、'92）は、同書の仮名書き唐音を韻書の二百六韻目に照らした分類表。このほか外国資料を扱ったものに成瞎慶「『倭語類解』の日本漢字音とその記載方法との関連について」（『岡大国文論稿』21、'92）成「『倭語類解』における日本漢字音の性格」（『東北大学言語学論集』2、'93）があった。

7　その他

奈良時代語の音韻を扱ったものとして小倉肇「オ列甲乙の合流過程に係わる問題――u～oの音相通現象をめぐって――」（『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂、'93）は、オ列二類対立の「合流」に関する諸説の検討とウ列とオ列甲類の「音相通現象」を取り上げる。東ケ崎祐一「万葉仮名「閇・米」について――中古漢字音の音変遷に関連して――」（『日本語学科論集（東北大学）』3、'93）は、中国側の音韻変化によって「閇・米」が乙類表示から甲類表示に転換したことを述べる。坂元宗和「カネ（金）～カナの交代は露出形と被覆形の交代か」（『国学院雑誌』92・2）は、古形カニ甲を想定する。サ行子音の音価推定に住谷芳幸「『在唐記』字母釈記載の日本語音節サの音価」（『小松博士退官記念日本語学論集』）、四つ仮名については次の二編があった。高山知明「破擦音と摩擦音の合流と濁子音の変化――いわゆる「四つ仮名」合流の歴史的位置づけ――」（『国語国文』62-4、'93）、今野真二「音韻資料としての大山祇神社連歌――四つがなについて――」（『早稲田日本語研究』創刊号）。個別資料に即した研究として諸星美智直「相応院お亀の方消息の音韻・語法」（『国語研究（国学院大学）』56、'93）、杉戸清樹「『捷解新語』タ行オ段拗長音子音部への音注について」（田島・丹羽編『日本語論究』2、'92）、江口正弘「ルイス・フロイスの日本語表記――HISTORIA DE JAPAM から――」（『国語国文』62-8、'93）などがあった。

四、おわりに

豊富な資料に支えられたアクセント史研究の高揚に比べて上代語母音組織に関する研究は少なく、四つ仮名やオ段長音の開合、ア・ヤ・ワ行の音節の統廃合など旧知の個別問題についても概して低調であった。このことは、個別的な課題に対して個別的なアプローチで臨む限りもはや研究が成り立たなくなったことを示している。音節構造の変遷をめぐる理論的研究が相対的に活況を呈していることもこの現実をある意味で照射するものであろう。

思えば日本語音韻の「歴史的研究」に長らく影響を与えてきた有坂秀世の理論は、近代科学が古典学と歴史学との区別をつけはじめてまだ日の浅い頃の記憶を色濃く残したものであった。音韻を発音運動の理想とする有坂の研究は、やはり大きくみて日本古典学の系譜に属するものであるだろう。それは、たとえ研究対象が過去のものであり「史的研究」を名のるものであったとしても、すべての対象を相対化する歴史学的な方法とは異質のものであると言わざるをえない。山田孝雄の何篇かの『文法史』が歴史的研究と言えるかの議論があるのは周知のことである。奈良時代以前を漠然と一括して「上代」と扱ってしまうのは国語国文学界では今も一般的であるが（現に評者もある場合にはそうしてきた）、このような「古典古代（中世、近世も同様）」的認識が有坂「音韻論」の影響力を支え続けたのであ

る。断っておくが評者は「古典古代」的認識の有効性を否定しているのではない。研究者が「古典古代」と「歴史的古代」を分別しないのが問題であると思うのである。この区別を踏まえない限り、外来の何ほどの瀟洒な理論装置を振りかざしたとしても土台の古色は覆うべくもあるまい。これはむろん自戒である。

論文の収集に際して、小林隆氏はじめ国立国語研究所関係各位にお世話になり、感謝申し上げます。

――名古屋大学文学部助教授――